
True Night

如月 琴李

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

True Night

【NZコード】

N5694Y

【作者名】

如月 琴李

【あらすじ】

月夜に翻る黒い装束、銀色の仮面、人は彼を怪盗黒猫と呼ぶ。ただ、ある冬の日の夜いろんな偶然が重なつて、不幸を呼ぶ存在だと名乗る彼と出会つた私は、どうしてもその姿を憎めなかつた……。でも私は、どこの誰だかわからない怪盗のことなんか考へてる暇ない。8年間ずっと顔を忘れた「彼」に会いたいから。見つかるかどうかわからなくても会えると信じてずっと生きてきた。だからその時まで、まだ知らないでいたい。……結論として王道を突つ走つてゐるどこか遠い外国の意固地な一人の物語です。（閉鎖サイトから

の転載になります）

1・暗い影の訪れ（前書き）

若干見切り発車かもしれません。妄想が止まらなかつたんです。
ということで趣味しか入つてませんが、頑張ります。
暇つぶしにでもしてください。

1・暗い影の訪れ

丸い月に暗い闇。浮かび上がるは黒い影
その姿を見たものは皆、彼をこう呼んだ。

「黒猫」と

黒猫は避けて通れ

誰が初めに言つたのか、この世にそんな言葉のある時代の中で。

記憶にうつすら残つてゐる微かな思い出。

顔は思い出せなくともずっと何かが頭をとりまいていて。

『帰つたら聞いてくれ』

声変わり前の少年のアルト声は……今も忘れない。

「……あなた……起きなさい……起きなさいってばっ……」

そんなこと言われても無理だつて。どう考へてもベッジの気持ちよさつて犯罪だと思つ。あの暖かむしろかぽかわは他のビルに行つ

ても体感できるものじゃないもの。

だからなかなか出られない。出なければ何にも始まらないと分かっていても、今の季節、つまり冬に「こ」から出るには、人間の樂園追放と同じくらいの覚悟がいると思つ。いや、實際どうなのかは知らないけど。

「起きなさい……」

だからこの暖かさをみすみす手放す氣にはなれないって。かといって起きなければ

バフッ

「いやつて布団を引っ張がられるのだ。既にいつもの事だけれど、急激にふんわりした毛布の柔らかさと一緒に、体を取り巻いていた暖かさまで一瞬でなくなる。これ、まだ私だからいいけど、老人にやつたら確実に心臓止まると思うよ？」

「ほり早く起きてリー！」

体を貫く寒さに耐え切れずに瞼をうつすら開けたら、……傍にいたのは大好きな人。勘違いして欲しくないから言つけど女性だ。でも朝一番にそんなに思考は働かない。

「ラルタ……

どうして起こしにくるの……ねむいー

つい起き上がりながら、突っぱねるようなことを言つてしまつ。

……「めんなさい」。でも

「だつてあんたが自分で起きるの待つてたら日が暮れるから」

「の人も口の悪さには定評あるからまあいいかつて思つ自分もいる。

「……それは酷いんじゃないの？」

「本当のことでしょう？」

「…………」

「ここまで言われても否定できなかつた。

そして、そんな何も言い返せない私の頭の上から、更に降つくる容赦のない声。

「いい加減にその寝坊癖直さないと、社会に出て困るわよ?」

「一体何年先の話よ。大体……ふあ……今日日曜日でしょ?」
カレンダーを見ながら伸びをして、あくびをする。確かに今時刻は9時で結構な寝坊ではあるけど、日曜日位いいと思つ。

「そうよ。でも今日みたいな重大な事件があつた日に暢気に寝てゐなんて馬鹿のことよ」

「へつ重大事件?」

するとラルタは急に私の目線に合わせるようにかがみこむ。そして真剣な面持ちでゆつくりと告げた。

「……この町に 黒猫が現われたの」

「は、はあああ!————」

完全に目が覚めた私はベッドで座つたまま器用に数センチ飛び跳ねていた。その単語には嫌な意味での聞き覚えがあつた。

大体黒猫なんて不幸を呼ぶ名前にいい聞き覚えがあるわけもない。

「シャットさんの家を昨夜荒らしたつて」

「……で、捕まつたの?」

「捕まつてたら私は日曜からこんな風にあんたを起こしに来ないでしょ!」

「…………確かに」

『黒猫』……今の『』時世その名を知らないのは、よつぽどの世間知らずか、世捨て人かつてぐらいた話題沸騰中の人物だ。でも彼はアイドルや絶滅しかけの貴族じゃない。荒らしまわる捕まつたと言つ言葉から推測して欲しい。信じられないかもしけないが……怪盗なのだ。

人呼んで怪盗黒猫。

かの有名な怪盗アルセーヌ・ルパンの手口がどれほど鮮やかでも、所詮それは小説の話。黒猫は、今この時代に実際にいて、様々な町の闇に出没し……鮮やかな手口で金目の物を奪い去つて、消えていくまさに神出鬼没の大怪盗。ただし彼は小説で読んだ他の怪盗のように予告状は出さない。だからどこに現れるか分からぬ。それが理由で一部の人達は怪盗の美学に反するとか何とか言つてゐるらしい。ただ、私個人の意見としては、もしあつたとしても結局捕まえられないんだから無駄だと思う。その小説がそうで、無駄な労力つていう言葉がぴったりだつた。

それでも彼が怪盗として名をはせているのは、その姿形が泥棒といふにはあまりにも特殊すぎるせいだ。見た者が一様に声をそろえるその格好は、真っ黒なスーツにマント、加えて顔の上を覆う銀色の仮面は性別すらも判然としない幻想的な空気を醸し出している。

ちなみに彼に黒猫と名付けたのは、世間の人々だつたりする。月夜に浮かびあがる黒い姿と、闇の中を飛び交つあざやかな身のこなしは猫のようであり、さらに狙つた家には必ず損失をもたらすので、と誰ともなく言いだして、定着したらしい。美術館や、宝石店は一切襲わず、個人邸宅ばかり狙うのも特徴で、それも決まつた住処を持たない野良猫を連想させる。だからこうしてラルタが私にわざわざ報告に来るのだろう。

「この家にも入るかもしねないわね」

現に溜め息をつきつつラルタが窓を見つめていた。この家は、豪邸とは言い過ぎだが、住みこみメイドや警備員もいる立派な邸宅だから、その心配はよく分かる。

「…………その時は私が捕まえるから安心して！」

そして私はそんなつもりなんかなかつたはずが、いつのまにかものすごく勢い込んでいた。まあ無理もないかと自分に言い訳をして深呼吸して落ち着いているとラルタがふつと笑つた。

「…………リーラ。気持ちは分かるけどね。あなたは女だから、おとなしく警察に任せたほうがいいわ」

「な！ 馬鹿にしてるラルタ！？ 私だてに体鍛えてるわけじゃないのに！」

一応小さい頃から一生懸命剣だの、格闘技だのやつてこりういう時に一矢報いるためなのに。なんで頼つてもられないんだろう。

「…………別に馬鹿にしてるわけじゃなくて。あんまり無理をせると父様や母様が心配するのよ」

「ついいもん別に。自分の身くらい自分で護れるし」

「それだけじゃないんだけど…………」

ラルタは溜め息をついて私を見る。いつたい何が言いたいんだろう。

「まあいいわ。ほらわざと着替えて」飯食べに降りてきて。 ものすごくメイドたちが困つてゐるの」

そう言つて部屋を出て行つた。

「はいはい…………悪うございました」

ラルタの消えていった扉を見ながら呟く。

本当は私は、メイドさんに何かしてもらひえる身分ではない。でも人に迷惑を掛けることはできない。

私は沈みかけた気分を変えるために伸びをして周りを見渡した。目に映るのは結構な値が張る家具達だ。それは私がラルタから『借りて』いるものだ。期間はもう十年近くになるけれど畳上はそつなつてている。

ベッドから出るとパジャマを脱いで、等身大の鏡に映る自分の姿を見た。スタイルは無視するとして、肩まであるこげ茶色の髪に緑

の瞳の少女がこちらを見つめ返している。

『どうみても異国の血が入っているこの瞳。そして青い宝石のネックレスがちゃんと首に掛かっていることを確認した。私がこの家に来た時に、初めてプレゼントされたものだ。』

『これだけは、無くすわけにはいかない。』

あの田

『口が悪いながらも優しいラルタがもしも必死に彼女の両親に『引き取つて』と頼んでくれなかつたら。私も彼と同じく今頃は遠い孤児院行きだつた。』

『そしてこんな不自由ない暮らしなどできるはずもなく細々と過ごす日々だつたはずだ。』

『ただ、その『彼』が誰かは、もう思い出せないけれど』

『顔も名前も忘れてしまつた。既に残つているのは一緒に過ごした時間と、傍にあつた温もりと彼の不器用な優しさだけ。』

『いつかラルタに『それ初恋でしょ?』と言われたけれど、どうなのが分からぬ。それはもう私の中に『思い出』としてあるもので、小説を読んだ時の主人公の言葉のような、胸をさす感覚や心臓が止まりそうな感覚や、ぼうつとしてしまつて食事も喉を通らないとかいう感覚は全くないから。あるのは……』

『ほんわりとした暖かさと、胸に甦る寂しさ。けれどそれを時間といつ一瞬一瞬厚くなつていくベールがどんどん被さつて、見えなくなしていく感覚ぐらいだ。』

『本当のところもう『心の思い』がどうこうものなのかも分からぬ。でもそれでもいい。きっともう出会うことはないのだし、もうす

ぐ忘れてしまうのだと漠然と思うから。

8年も経つた今いくら会いたくてもそれは無理なことだと感じている。

中身のなくなつた暖かさだけを残して思い出に変わつてしまつた記憶なんか

私なんか忘れてる気が……そつと自己紹介つ！！

別に今までの流れから、私がリーラで、親友がラルタだということは分かつていてると思うけれど、少しだけ聞いて。

つていうのも、実は、私の名前はリルト・アンテールだから。でもラルタをはじめ、本名を呼ぶ人は私の周りにはいない。口が回りにくいかからと、皆リーラと呼ぶ。そのせいで時折本名を忘れ去られるけれど、私はこの呼び方を結構気に入つてるからあまり気にしない。

ところで、ラルタのフルネームはそのままラルタ・ディロット。そして、私とラルタの名前が全くかぶつていはないのは……あの日以降、私がこの家でよく言えば養女、悪く言えば居候の形をとつているからだ。ラルタの家はお金持ちで、人一人増えたからつて全く問題ないほど裕福だから、という理由でお世話になつてている。

感謝してもしきれないので、その経緯については今は置いておく。またいずれ話す機会もあると思うから。

ちなみに、彼女と私の年は同じ。ただ、生まれたのは私よりも1ヶ月ほど早くて、今は名実ともに私よりも年上。彼女は私と違つてクールでめつたなことには動じない。さつきみたいにお姉さん気質を私に向かつて發揮するのはしょっちゅうだ。勿論それが嫌ではないし、私はラルタが大好きで、本当に今をこれ以上なく幸せだと、思つていてるから。

着替え終わってからなるべく静かに部屋を出た。だが、出来るだけ音を立てないようにしていたにも拘らず、私が階段を降りる音を耳ざとく聞きつけたらしー。

「遅すぎリーラ。どれだけ着替えに時間かけたら気が済むの？」

食堂にいたラルタからいきなり毒舌が飛んで来た。ちょっとむつとしたけれど、だいぶ時間が経っていたのは事実だ。

「ごめん。ちょっとと考え事してて……」

座りながら素直に謝ると、彼女はその唇に薄く笑みを浮かべた。

「また『彼』？」

そう言われれば私はどうしても恥ずかしさに頬が熱くなるのを抑えられない。こりして誤解されていくのだ。

「ちょっと違つて」

「図星ね」

表情はあまり変えないながらも、楽しそうに囁つてラルタを見ていると、つい自分つていいカモなんだと思つてしまつ。勿論ラルタは獵師だ。けど、このままはちょっと悔しい。

「……あのねえ『彼』はもう思い出の住人だつて何度も言つてるでしょ？それにラルタはそういう人はいないの？」

逆に聞いてみた。すると彼女は僅かに楽しそうだった表情を一瞬でひつこめて私を睨みつけてくる。

「いる訳ないでしょ？？」

即答の上に疑問形。いや聞かれても困るんだけど。答えは分かるにしてもね。

思い切つて私は話題を引つ張つてみることにした。

「でもラルタつて、そんなに綺麗なんだし……ファンも多いし……彼氏ぐらい作ればいいのに……」

「……嫌よあんな下等生物」

「……今、世界中の半分の人を敵に回す発言したことに気付いてる

？」

あんまり辛辣な言葉を一応確認する。

「それが何よ？」

ラルタは表情一つ変えないままにコーヒーにミルクを入れている。しかもまたしても疑問形。答えは見えたけど今度は答える気がしない。私の完敗だった。

「もういい……」

「そう？」

ラルタは他に類を見ないほど男嫌い。本当につべづべもつた以為いと思う。

なんてつたつて黒い瞳に黒い髪の、女の私でもつらやむほどテン系のものすごい美人で、おまけに頭も良くてお金持ち。性格はちょっと問題あるけど。でも本人が『下等生物』って言ってたんじやどうしようもない気はする。それにしても、この世には男と女しかしないつて事ちょっとは分かつてもいいと思う。

そんなことを考えていたらいつの間にか何もなかつたテーブルに朝食の用意が並べられていた。

私は傍にいたメイドさんに『ありがとう』を言って、実は空腹を我慢していたお腹を片手で押さえ、パンを手に取つた。お腹が鳴るのがマナーに反するつてことぐらい知つている。

既に朝食を食べ終わつていてやることがないのか、ラルタは私の正面でコーヒーを飲みながらくつろいでいた。

断つておくれど、どいかのお城のように一人の距離がものすごく開いてるつて事はない。ラルタはお嬢様だけど、ディロット家の人々はみんな仲が良くて、団欒を大事にしている。だからテーブルも4人家族の標準サイズで、大体2メートル位かな。

それから15分後、私はかなりへこんでいたらしいお腹を漸く満足させて、食事を終えた。

「そういえばね」

その矢先のことだつた。珍しいことにラルタが自分から話し掛けてきた。

「な、なに？」

少し驚きながら答えるとラルタは真面目な顔で聞いてきた。

「今まで黒猫が来るのに予告状が来たつて話聞いたことある？」

唐突な話題。しかもまた黒猫のことだ。私は即答しようとしたけれど、一応目を天井にやり、覚えている限りの新聞記事の文面を探つてから答えた。

「…………ない」

「そうよね。私もないもの」

「大体そつじやなかつたら、シャットさんの家が泥棒に入られるなんてないと思うけど？」

あの家は自他共に認める富豪の家なので、そういう警備には特に厳しいのだ。もし何かあればきっと警備する人数が倍になつていたはず。私の言葉にラルタは大きく頷いた。

「ええ……でもね。予告状の代わりにあつたらしいのよ、不思議な出来事」

「どんな？」

きつと私が起きる前に収集してきた情報なのだろう。ラルタは私と違つて早起きだから。

「黒猫に入られる3日前には、シャットさんの奥さんが出かけたときには…………見るからにぼろぼろの孤児に会つたらしいの」

「孤児？」

その単語に思わず反応してしまつ自分に少し嫌な気分になつた。でもきつと一生変わらないのだ。

ラルタはそんな私に構わず話を続ける。

「そう……で、その孤児がいきなりシャツさんの奥さん……洋服の袂を掴んで瞳を見つめてこいつ言つたんですって」

『お恵みを、わずかばかりのお恵みを』

「……って」

「……そ、それで？」

思わずつばを飲み込んで、私は先を促した。

「勿論シャツさんの奥さんは……怖くなつて逃げたらしいけど」

言い終わると「一ヒーを一口すする。

「や……道歩いて、普通そんな言い方されたら絶対怖いと思つけど、中にはあげる人もいるんじやない？」

我なら絶対躊躇わない。

「まあ、恵む人もいると思うけど……奥さんなり……多分駄目でしょう。去るときにおそるおそる振り返つたら、その孤児が彼女を物凄い目で睨んでたらしいわ。声は聞き取れなかつたらしいのだけど

……その口の動きは」

『汝に不幸があるよ!』

「……って言つていいよ!」に見えたって」

「……そ、それって」

かなり怖い話だ。でも、言われて少し考える。この話、筋は通つてゐるし、もしこれが奥さんじゃなくてシャツさん自身だつたら結果は変わつっていたと思つ。なぜなら彼は誰もが認める『いい人』だから。

けど、身分を気にする人もその家には多く彼の奥さんもその一人。だからラルタはご丁寧にもいつも『の奥さん』ってつける。彼女なりの敬意の表し方だ。

「で、盗まれたものは……奥さんのイアリング。50万のね」
「…………」

「あながち自業自得と言えなくもない。

「その話を聞いた警察は、その孤児が怪しつて踏んでるみたいな
んだけど……その子の人相がコートに日深の帽子。しかも全部黒
ずんでるからよく分からんらしいわ」

それはまた用意周到なことだ。

「その子、黒猫とグルなのかな？」

ラルタに聞いたって分からぬだろうに考える前に聞いていた。

大体彼女の話は全て伝聞形だ。

「そうだつて意見が多数出てるわ」

「じゃあラルタがもしそんな子にあつたら、ちゃんと何かあげれば
問題ないのよね？」

そうすればいくら裕福でも、この家に危害は及ばないはず……。
するどラルタは何故か目を伏せた。

「…………多分」

「どうして？」

「だつてね……今までの町でどうしてその話が噂にならなかつたの
かは知らないけど……今はこの件はもう町中の噂だわ。これを聞
いた人は確実に彼らに何かを与えるでしょう。そうすると真意は分
からぬから　彼らは一日おきに町を変えなきゃならない」

いつだつて論理的なラルタ。頭の回転もすごく速い。そして確かに
にその通りだ。

「つまり、彼らはそつとは悟られないようなことしてくるわ。きっと
ともつと大胆なこと」

「大胆なこと？」

思わず聞き返してしまつ。さつきの事だつて結構大胆だと思つん

だけどこれ以上何をするつもりなんだろう。

「たとえば……いきなりひつたくるとかね」

「……犯罪じゃない」

「いくらなんでもそれはと思う。けれど更にラルタは確信を持つて続ける。その瞳は感情がなくて怖い。

「あら、もともと犯罪者じゃない。大体人の器を図るならこれ以上の事はないと思うけど? その人が盗られても気にしないかどうかつてね」

「いや、それ誰だつて怒るつて」

「じゃあ孤児なら?」

じつと何かを促すかのように私の瞳を見てくるラルタ。でも私はどう答えたらいいんだろう。彼女にその気がなくたつて、どうしても重い気分になつてくる。

「……」

答えられずに黙つてしまつた私を見て、急にふつと視線をずらし、ラルタは時計を見た。

「リーフ、……今日私買い物行かなきゃならないんだけど……あんたも来る?」

これはつまり…………お誘いだ。ラルタと出かけるなんてビのくらいぶりだろう。一瞬で嫌な気分も吹き飛んだ。

「行く!」

満面の笑みで告げた。するとラルタはそんな私を呆れ顔で見て、「ねえ犬耳と尻尾しまつたり?」

とだけ言つた。

「?」

訳が分からず、首をひねる。私そんなもの付けてたつけ?

1・暗い影の訪れ（後書き）

お読みくださいこまして、ありがとうございました。

2・後悔したつてもつ遲い

「いい天気ー やつぱり買い物はいいよね！」

ファッショングループの店が並ぶ中心街のメインストリートを歩きながら、茶色いコートにお手製の青いマフラーと同じ色の手袋姿で普通より大分重い両腕を上げながら横を振り返った。

「分かつたから少し落ち着いてよ。初めての子連れてるみたいで恥ずかしいでしょ？」

でも、緑色のコートと白い手袋、白いマフラーを着たラルタからは、相変わらずのお言葉が返ってきた。

「……ごめん」

自分でも少し子供っぽすぎた行動を反省していると、ラルタは聞いているのかいないのか傍のショーウィンドウを覗いている。

「全く……あらこのリボン可愛いわね」

「えー ラルタには似合わないと思つけど

すぐに気を取り直して、覗き込んで相槌を打つた。

ラルタが見ていたのは白いリボン。レースや飾りのないシンプルなもの。ただ、ラルタはショートヘアだから髪につけるならバラとかビーズとかそういう華のある形の方が似合つ。要するにリボンって感じじゃない。だからそんなことどうして言つのか分からなかつた。

「あんたによ……」

ラルタがぼそっと言つたその意味を考える。でも考え終わる前に私はラルタに笑いかけていた。

「ありがとう！」

こういうとき自惚れかもしれないラルタは私が大好きなんだつて思えてすぐ嬉しい。ラルタがこんなふうに言葉にしてくれるのって珍しいことだから。今日は本当にいい日だと思つ。

「あーはいはい離れて」

そのまま腕を組もうとしたはたかれた。

腕くらい組んだつていいじゃないとは思つたけれど、やつぱり子供っぽくて呆れたんだろうか。

「…………

私が思わず黙り込んだそのときだつた。

ドンッ

衝撃と共に体が前のめりに傾いた。いきなりのことだつたから、一瞬何が起こつたのか分からなかつたけれど、持ち前の運動神経で急いで体勢を立て直しなんとか転ばずに済んだ。

何がが私たちの間に無理に割つて入つたんだろう。隣には運動神経があまり良いほうじやないラルタが倒れていた。勿論何とかしなくちゃと思つたんだけど、私はラルタが倒れる前と後とで何かが変わつてゐる気がして仕方がなかつた。

「リーラ、バッグつ

そう言われて、ようやくラルタの紺色のバッグがなくなつていてと気が付いて周りを見回すと、それは少し先に立つてゐる見知らぬ少年の手にあつた。

「なつあの子！」

見た瞬間に瞬間的に足が動いていた。

ラルタが止めようとしていたけれど聞こえないフリをする。

「待ちなさい」

大声で叫んで走り出した。すると少年は我に返つたように逃げ始める。

これ、ひつたくりだ。順番は逆だけれど追いかけながらやつとう思つた。

「ちち……すばしっこーー」

必死で追いかけているし距離も確実に縮まっているけれど……
その少年は身軽さを武器にとんでもない逃げ方をする。木の上に
いるかと思ったら、裏路地に駆けていくし、そりかと思えば屋根の
上だ。

「はあ……はあ……待ちなさいーー」

おまけに見失わないように律儀に少年と同じルートを通りのでい
い加減息も切れてくる。しかもコートの下で首に下げたネックレス
がかつかつ鎖骨に当たって痛い。

取ればいいんだろうけど、これをなくしたら本当に大変なことに
なるから、今までお風呂の時以外は外したことはない。錆びてしま
うから。

だから今も外す気はなかつた。

「こ」のぐらーいの額恵んでくれたつていいじゃない、わりとしつこい
んだね」

裏路地を曲がった時、何故か逃げずに田の前にいた少年が挑戦的
な目を向けていた。

顔は路地が暗いからわからないけれど、見るからにお金のなさそ
うな身なりで、ひつたくりが生活にとって必要だつたと語っている。
けれど、そういうわけにはいかないのだ。

「駄目よー、それはラルタの大事なものなの。」

他のものならいざ知らず、これは彼女の両親からの大切な誕生日
プレゼントだ。

「ふーん。あんなに裕福なのに心は狭いんだね」

「…………」

なんつづ事を言い出すんだこいつは。思わず少年を睨みつけた。
すると彼の唇がゆっくりと動いた。

そんな音が、聞こえた。

「なつ」

しばらく状況理解に勤めて……やつと我に返つた。

今朝のラルタに話を聞いたばかりだったといつのに。私、もしか
しなくともとんでもないことをやつちやつたんじやないだろうか。
「ちょっと……あんたまさか」

震える声で問い合わせにならない言葉を発する。少年は歳に似合わない
含み笑いを浮かべた。

「きつとお姉さんの考えてる通りだよ。不幸が訪れる
直感的にその意味がわかつてぞつとする。

「だめ！ お願いそれだけはやめて！」

「……駄目だよ。こいつの不手際だったとはいえ、お姉さんはもう
知ってるんだから」

有無を言わせない少年の言葉。不手際といふことは……やつぱり
この話が漏れるのは、予想外といふことなんだ。いやそれよりも、
どうして自分より大分歳下のこの少年の方が、有利に事を進める空
気をまとってるんだろう？ なんかこの子、得体が知れない。むし
ろ……怖い。

「それは……大事な人の父親からの誕生日プレゼントなの！ だか
ら返して！ 代わりにこれあげるから」

でも、こればっかりは譲れない。これをなくしたらきつとラルタ
とつても悲しむから。だからここは精いいっぱいで頼んでみるしかな
い。一か八か、自分のしてたマフラーを差し出した。首筋が急に
寒くなつたことは気にしないようにして一步一歩少年に近づく。

「きつとこれで、寒さはしのげるから……だから……お願い手を出
さないで……私の大切な人の幸せ……壊さないで」

そのときの私は恐怖も忘れて必死だった。少年の首にそれを巻い

てやると彼の瞳が少し優しくなった。

「…………話してみるよ」

彼が言つたのはそれだけだつたけれど、誰にかつていうのは分かつた。

少年はラルタのバッグを私の手に押し付けると、数歩距離を取つた。そうなつてから、見るからに孤児らしいみすぼらしい格好なのに、あんまり不潔な感じがしなかつたことに気がついた。けれど無意識に少年に近寄ろうとする、彼はにっこりと笑つた。毒氣を抜かれて思わず足が止まつてしまつ。

「じゃあねお姉さん」

「あ……」

そしてその隙を逃さず、そのまま駆けついた。と思つたら振り返つた。追いかけても捕まらない距離で。

「ねえ、名前なんて言つの？」

ターゲットつて事ね。そう思つて諦めながら短く答えた。

「リルト」

言つた途端に少年は目を見開いた。

その意味は、私には分からなかつた。けれど彼のその目は焼き付けるかのように私の全身をじっくり見てゐる。特に私の緑の瞳を。そしてまた唇が動いた。

「…………汝に不幸あれ」

そう言つて今度は一度も止まらずに、走つて行つた。

「な、なんなの…………よ」

私は思わず、その場にへたり込んでしまつた。なんだかもう、いっへいいっへいで、張り詰めていた糸がぶつんと切れたよう。

「リーラあんたどこまで行つてたの？ つてマフラーは？」

絶望的な気分で歩いてラルタの元に戻ると……彼女はいきなり私に駆け寄ってきた。けれどその問いには答えず、バッグを差し出す。

「……はいラルタこれ」

けれど、ラルタは受け取るうつはせず、代わりに私の肩にそつと手を置いた。

「……少し休んだ方がいいわリーラ」

「うん…………ありがと」

促されるままにラルタと一緒に近くのカフェに入った。

そこで勝手にラルタが注文した大好物のカプチーノを飲んでいると、唐突にラルタが黒い瞳を私に向けてきた。

「あんたあのマフラーどうしたの？ すぐ気に入つてたじやない」

忘れ去られていなかつたことにはどう答えていいか一瞬迷つたが、丁度窓の外に木枯らしが吹いて葉っぱが風に舞つていたのが幸いだつた。

「えつえーっと追いかけてるうちに風で飛んじゃつて。追跡中だつたら、諦めたの。あーあ、また編まなくちゃ」

まさか私があげましたなんて言える訳がない。でも私は演技が下手だから、きっとラルタには見抜かれているんだろうな。

「ふーん」

彼女の瞳は揺れていて、やつぱり半信半疑らしい。私は話題を逸らすこととした。

「ね、ねえラルタ……その、中身ちゃんとある？」

ラルタの膝に乗つたバッグを指さすとラルタは私を見て、次にはチャックを開けて中身を一つ一つテーブルの上に出して確認を始めた。そして数分後。

「ええ……何一つ盗られてないわ」

落ち着いた声でそう言われ、漸く私は緊張が解けていくのを感じた。

「よかつたあ」

安堵の声が自然と出た。カプチーノをまた一口飲むとやつと飲んだ心地がしたくらいだ。甘くてそれでいてほろ苦いこの味が昔から大好きで、飲みたい時にくれるのは本当にありがたいことだなと、思つたら、店に柔かい音楽が流れていることにも気がついた。

どうも相当動搖していたみたいだ。

やがてラルタは少し長めのトイレに立つた。そして帰つてくるなり、椅子にかけていたバッグを持つた。ずいぶん長居していたからショッピング再開かなと思つていたんだけど。

「…………そろそろ帰るわよ」

いきなりそう宣言する。なんで提案じやないのだろう。でも今はそれよりも気になることがあつた。

「ら、ラルタはもういいの？」

あんな騒ぎがあつたからまだどこにも行つてない。今日は買い物するつて言つて出てきたのに。

「ええ私は用が済んだからいいわ」

…………はずが。いつ用を済ませたの？

「ち、ちなみに……なんだつたの用つて？」

聞いていいのかと思いながらも問いかけると、ラルタはゆっくりとバッグに手を入れた。

「これよ」

それは掌に乗るほどの大きさの小さな白い箱だった。それが私に向かつて差し出されている。不思議に思いながらもラルタに促され

て、開けてみた。小さな期待をそれと知らず胸に感じながら。

白い外とは対照的な黒い布を下に敷いた箱の中に、丁寧に納められていたのは、さつきの白いリボンだった。

私は、理解が追いつかない。

「」これって 「誕生日おめでとうリーラ」

なんとか言った言葉を遮られて、初めて気がついた。明日は私の誕生日だということに。

どうやらトイレストア言つておきながら店を抜け出て今買つてきたらしい。

「あ、ありがとうございます！」

心からの感謝をこめて、大好きな親友に満面の笑みを向ける。するとラルタは急にそっぽを向いた。

「気にしないで。あんたにも……ありがとうございます」とい健全なだから

言う少し顔が赤い。非常に珍しいことにラルタが照れていた。

確かにそれはとても嬉しかったけれど……だからこそ、私は能天気に忘れかけていたことを思い出してしまった。はるかにいたはずの気持ちは急にしぶんでいて、少年の言葉がぐるぐるぐるぐる頭の中に回りはじめて、どんどん肩が重くなる。嬉しかったはずなのに、せつかくラルタが買つてくれたのに、家に帰りつく頃には楽しい演技すらできなくなっていた。

『汝に不幸あれ』

あーもう、どうしよう……。

ほぼ同時刻、リーラの悩みの種の少年は走っていた。そこは既に道なき道といった方がいいかもしない。裏路地で狭く、彼以外誰もいない。とても殺風景な場所だった。やがて少年はある一角に立ち止まって声を掛ける。

「ただいま！」

その途端、今までどこにいたのかその場の高い塀の上にすとんと降り立つたのは……黒い影だった。顔は時刻のせいか、もともとここに明かりが差し込まないせいか、暗くてよく見えない。

「獲物は？」

影から発せられたのは低いアルトの声。

「兄ちゃん。それがね」

少年は先程のリーラ相手のときは打つて変わつて彼に幼く甘えるような声で話しかけた。

「なんだ？」

『兄ちゃん』と呼ばれたほうは怖い印象だが、彼の話を聞く気はあるらしい。

「ひつたくつたはいいけれど……取り返されちゃつた。代わりにマフラー受け取つたけど」

「つむく少年のその首にはしつかりと青こマフラーが巻かれている。

「で、名前は、聞いたの？」

別方向から声がした。この声は少し『兄ちゃん』よりも高い。背の高さは彼と同じ位で少年であることも間違はないが。

「それが……『リルト』つて」

その方向に向かつて意を決したように叫ぶ。するとわずかに塀の上で黒い影が動いた気がした。

「……」

その意味が分かったのか少年はかなり勢い込んだ。

「ねえ兄やん？ もしかしてもしかするかもしれないよ？」

聞いた

とおりの容姿だったし

「…………まさか」

心底否認するような声。すると更に少年は続けた。

「だつて覚えてないんでしょう、どの街だったか

「…………」

「どうするの？ あの子の家……襲う？」

こつでもこの少年が会話を続ける役らしい。

「…………」

しかしそれでも黙つたままの『兄やん』。まるで影のよひ、立ち尽くしたままだ。

「…………どうする？」

「…………お前はどう思う？…………」

問われた『兄やん』は逆にそちらを向いて問いかける。相当迷つてこるようだ。

「俺は……そうだな。確かめる価値はあると思つよ」

「…………どうするの？」

それを受けて少年がまた聞く。すると『兄やん』は溜め息をついた後で、空を見上げ、誰に言つてもなく呟いた。

「…………始めるか」

低い声が闇に溶けた。まだ太陽が沈むには間があったが、ここだけは既に真夜中のような気配が漂つていた。

3・それぞれの時間

一方そんな会話が行われているなんて露知らず。夕食前のティロット家の一室には綺麗な夕焼けと不釣り合いなほどの暗澹とした空気が充満していた。

「どうしたらいいんだろ?……」

リーラは椅子に座つて、血室で頭を抱えていた。

「やつぱりラルタに言つべきかなあ」

そう言って立ち上がつたかと思えば、

「…………言えないよね」

電池が切れたようにまた座り込み

「私が悪いんだし……」

と俯いて

「はああああ

頭を抱えるのである。

そんなこんなをさつきから彼女はずっと繰り返していく。

『汝に不幸あれ』

でも、そもそも不幸つて一体誰にだろ? 言葉の意味を考えれば私自身だけれど、この家に、ならばラルタやラルタの両親にも危害が及ぶ。それだけは避けたくて、でも自分ひとりではどうしようもない。だからこうしてずっと悩んでいる。

「ああーどうしよう

「なにがよ」

「だーかーらー私のミスで近いつて黒猫がこの家に来るかもつてつてラルタあ! ?」

全部暴露してから、声の主に気付いて悲鳴を上げた。対するラル

タはいつ入ってきたのか、妙に落ち着き払つて私のベッドに優雅に座つてゐる。

「ふう……」じんなどだろつと思つた。あんたつて嘘つけないタイプよね」

「じ、ごめんなさい」

私はこれ以上下げられないくらい頭を深々と下げた。

「頭を上げなさい。今しなくとも、逮捕した後で謝罪はいやといつほどしてもらうから覚悟しきなさい」

「…………ハイ」

その凛とした声に従わざるをえない空氣を感じて急いで顔をあげる。

「さて、どうしたものかしらね。まず、父様や母様に言わなこと。ほら、行くわよ」

立ち上がり歩き出すと、ラルタに私も立ち上った。

「うん……」

でも元気なんて湧いてこない。ラルタはそんな私の様子を見かねたんだろつ。盛大なため息をつかれてしまつた。そして息をすうつと吸い込む音がして。

「そんなに氣にしてる暇あつたらとつと下降りて、金田の物を隠すの手伝いなさいー」

非常に珍しいことに怒鳴られた。

「は、はいっ」

私は慌てて弾かれたように部屋を飛び出した。

「全く世話の焼ける」

そう呟いてからラルタは部屋を出て行つた。

「ふう……疲れた」

自室で伸びをしてパジャマ姿でベッドに倒れこむ。青い宝石のついたネックレスに首が押さえつけられて痛かったがもうどうでもよかつた。そのくらい疲労困憊している。

あれからラルタの両親に正直に言つたところ、彼らは文字通り腰を抜かした。しかしそれもつかの間、ラルタの声で皆各自のネックレスや指輪を食堂に集め（私とラルタのものはないけれど）、家の地下の金庫に隠した。

けれども幾つあるか分からぬほどある壁の絵や置物などはどうしようもないということで、隠す作業は適当なところで切り上げられた。既に金庫はいっぱいになつたところもある。

そしてシャワーを浴びて今に至る。

時刻は既に11時を回つていた。

「でも私が…………守らなきや…………責任ある…………し…………」

全て言い終わらないうちに、私の臉は急激に重くなり、猛烈な勢いで夢の世界に引き込まれていった。

その少し前、すっかり暗く寒くなつた街の空に不釣り合いな影があつた。

「…………あの家か」

「うん…………結構もつてそうだよね」

「…………ターゲットは？」

それは、そんなことを言いながら「ヒロシト」家を近くの手「」の家の屋根から双眼鏡片手に眺めている三つの人影。その一つはあの少年らしく、一つは『兄やん』。一つは高い声の青年だ。だが、三人の顔はまたしても暗いので見えない。

だがその方が発見されにくいから彼らにとっては都合がいい。今夜は月がないのである。

「えつリルトじやないの？」

『兄やん』が聞いた声に、少年が驚いた声を上げながら彼を見る。

「あいつは金目のものなんてもってないだろつ」

即答した『兄やん』に少年は首をかしげる。

「何で分かるの？」

「…………」

彼は黙り込んでしまった。すると少年はぱつと頬を膨らませる。子供らしい仕草だった。

「もう兄やんはいつも自分の都合悪くなると話終わらせるんだから」「仕方ないよティム……特に今回は」

横からそんな二人の声を聞いていたのか、仲裁に入る声。

「そんなこといつたつてね。あんちゃん」

声のしたほうを振り返り、一生懸命自分の正当性を主張する少年ティム。

一方『あんちゃん』と呼ばれた男は夕方会話に参加してきた声の高い青年のようで、返事の代わりに溜め息をついた。

「…………もし逢つたとしてもどうすればいいかなんて分からぬだろ」

「…………」

その声に黙り込むティム。

沈黙がその場を支配した。

だがやがて、その沈黙に耐え切れなかつたかのよつに、唐突に横で誰かが立ち上がつた。

「そろそろ帰るぞ」

その声で、それが『兄やん』だと知れる。

「…………はーい」

「わかつた」

素直に立ち上がる一人。そして三人の影は瞬く間に闇に消えた。

私は不安を抱え込んで、やつと弧に見えた細い月を見上げた。

「あれから3日」

夕食後、すっかり日が落ちてから、私はラルタの部屋にやつてきた。ラルタの部屋はシンプルで椅子もないから、いつも私はベッドに座る。

「来るとしたら……今日ね。シャツさんの話だとその子供に会つて3日後だつたらしいから」

ラルタの声もいつになく硬い。彼女は銀行とかを駆け回つて金目の物を隠している間にも、いつのまにか抜かりなくシャツさんから黒猫の情報を聞いていたようだ。

「きつと来るよ……」

そう言つ私は今日寝るつもりはない。シャワーは浴びたけれど、ラルタの様に部屋着ではなくて制服を着ているのはそのせいだ。

「あのね……元はといえまあんたのせいなのよ？ 分かってる？」

「スミマセン」

そう言われればもう私はうなだれるしかない。

「じゃあ今日は戸締り万全にして、備えましょ」

いまだに罪悪感で一杯の顔をしている私にラルタの母親のティースさんは優しい笑みを浮かべてくれる。ああ、申し訳なさ過ぎて逆にいたたまれなくなる。

「母様……」

「おばさま」

「リーラちゃんのせいじゃないからね。気にしたら怒るわよ？」

でも、笑みを浮かべながらも有無を言わせないその言い方はラル

夕そつくりで、彼女の氣の強さは母親譲りだとはつきり分かる瞬間だ。

「……ハイ」

それでも、自分を責めないでくれるこの家の人たちの心の広さに、感動を覚える。涙が零れそうになるのを、精一杯堪えた。

「よしじやあ各自持ち場について」

「「「「はいっ」「」「」」

ラルタの父親のショーマンさんが無表情で家の皆に四つ。つまり彼女の性格は父親譲りということ。

ちなみに警察にはもうどっくに持ち場についてもらっている。前回シャツト家の件があつたのでリーラの不思議な話をした途端飛んで来てくれたのである。

シャツトさんには悪いけれど一番田でよかつたと思わずにはいられない。勿論こんな事考えているとラルタにばれたら殺されるだろう。けど私は、これを幸運と思えないような綺麗な場所で生きてるわけじゃない。

だから黒猫退治にも参加するつてティロット家の人たちを言つくるめたし、準備だつて整えてある。

さあ、絶対盗らせないわよ。どうからでもかかつてりっしゃいっ！

ほぼ同時刻。この警備万端の家をすぐ近くの建物の屋上から見ている三つの影があつた。

「ねえ…………兄やん、なんか楽しそうだね」

いやむしろ、そういう彼の声の方が楽しそうだった。なにせ『楽しそう』といわれた彼の表情はまたしても見えないものだから、声だけで判断するならティムの方がそうなのである。

「ティム…………」の格好の時はなんて呼ぶって言った？」

その『兄やん』は声のしたほうを振り返り、楽しいとは程遠い低い声を出す。もともとかなり低い声なので、その声はドスが効いていて少し怖い。真っ向から怒られたティムは少ししおげてしまった。

「…………黒猫」

「よし」

短く肯定した彼こそまさに……怪盗黒猫だった。

「何でわざわざそう呼ばばすのさ」

少しだけ声に呆れを混ぜて、『あんちゃん』が会話に参加してきた。けれどその言い方は彼が『黒猫』と呼ばれる理由を知つていてあえて問うものだ。

「…………」

その言葉に黒猫は黙り込み……答えるのを拒むかのようにその手に持つた仮面を顔に着けた。口だけが見える銀色の仮面。正体不明の黒猫の出来上がりである。

それから彼はゆっくりと傍にあつたマントを手にとつて羽織った。その時にバサツと広がつたそれはまさに闇だ。

そしてその音に重なる『あんちゃん』の声。

「いい加減。もう忘れたら？　あれは仕方ないつて皆言つてたじやん」

「赦されるならな

「…………」

そつけない言葉に、重くなる空氣、そんな一人をいち早く察して、ティムが急に声を挙げた。彼はこの小ささでかなりの苦労症である。「に、にい、黒猫、どうするの？　万全にされてるはずだよ警備」慌てて話題を変える。だが、思わず『兄やん』と呼びかけかけそうになるところが、まだまだ仲裁役としての未熟さを感じさせる。しかし黒猫はその言葉に怒りを表しはしない。

「だったら正面から行くのみだ」
余裕たっぷりにそう答える。するとティムは、何故か目を輝かせた。

「すごい黒猫！ ほんとに怪盗みたい」
「ティム、もうお前喋るな」

耐え切れなくなつたのか、彼は『あんちゃん』に一喝された。確かに彼の話のペースにあわせていたら、いつまで経つても話が前に進まない。

「…………」「めんなさい」

またしても、しょげるティム。黒猫はそんな彼を横目で見たよくな仕草をしたかと思うと、立ち上がつた。

「…………じゃ行つてくる。細工は頼んだ。1時間後にいつもの場所でな」

黒猫は一瞬振り返つたかと思ったら、それだけ伝え、その1秒後には屋根の上から飛び降りていた。

「了解。頑張つてね黒猫」

「…………」「…………」

その姿を全く異なつた表情で見ていた二人はやがて順々に屋根から下りて行つた。

バリイイイン

蠅燭が数本あるだけの食堂の窓ガラスが勢いよく割れた。破片がバラバラとあたりに散らばる。単なる鉄枠と化した場所から、入つていや侵入してきたのは……黒マントに黒髪に銀色の仮面の、黒猫だ。

怪我をした様子もなく絨毯の上に音もなく着地する。

「でたつ 黒猫お！」

私はその派手な信じられない登場の仕方にかなり興奮して椅子から立ち上がる。

「ほんとに仮面つけてるのね」

対するラルタは焦るでもなく、しかもコーヒーを飲みながらのんびりしていた。

ちなみに私達は黒猫の入ってきた場所からかなり離れた所にいたので無傷だ。

「ラルタ！ そんな暢気なこと言つてる場合じやないでしょ！」

私は叫びながら、出来うる一番怖い顔で黒猫を睨み付ける。ただ、黒猫には通じなかつた。むしろ、あまりの二人の反応の違いと、そんな会話を聞いていたのかいないのか……微かに笑つた気がした。が、今はどうでもいい。

この場所、つまり食堂は一番金目のものが何もないの、私達が守ると警察に訴えた場所だつた……主に私が、だつてラルタはやる氣ゼロだから。それでも付いてきてくれるのは、きっと心配されているからだと思つ。

勿論ここが進入経路だとは私も思つていなかつた。つまり鉢合わ

せは全くの偶然だ。けれどこのチャンスのがしてなるものですかっ！

「黒猫！ この家のもの盗れるなら、盗つてみなさい！！！」

私は大声で宣戦布告をした。さつとこの声で警官達が来てくれるはずだ。

「…………

しかし、そんな私の行動に恐れをなすこともなく、彼は黙り込んで止まつたままだ。私は戸惑い彼に近付こうとおそるおそる歩を進める。と、急に黒猫は我に帰つたように、私の脇を走り去り食堂を後にした。

わ、私の横を抜けるつて、どうこういつ？ あんまり反応が早くてついていけなかつた。

「あつ待ちなさい！」

それでも私は懸命にその後を追つた。

「…………馬鹿なんだから」

その姿を見て、ラルタはほほつりと笑ぐ。逃げるものを見れば追う。追う方はいいかもしれないが、見ている方はいい加減に疲れるのだ。

「まあ…………仕方ないわね」

誰にも聞こえない声は空間に消え、消えた言葉はもつ返らない。聞く者がいなければ残らない。

食堂から出て追いかける私の目の前には今勿論黒猫がいる。そしてその目の前には大勢の警察……がいてもよかつたのに…………何故か皆ぐうぐうと眠りこけている。傍の窓が開いているところを見ると、彼等は何かされたらしい。でも一体誰に？ 黒猫に仲間なんかいたの？

でもそれよりも黒猫の足の速さに驚く。これは確かに捕まえられないわけだ。私、結構足には自信があるのに、付いて行くのがやつとだつた。中年の警察官じや、無理があると思つ。いや勿論体は鍛えてるんだろうけど、しなやかさが違う。つてことは黒猫は結構若いんだろうか。

そんなことを考えながらも足は必死で黒猫について行った。廊下を走りぬけて途中で見えなくなつたが、角を曲がると一番豪華な扉、つまりそれだけ調度類や絵画の多い大広間に黒いマントが消えるのが間一髪で見えた。当然かもしれないけど黒猫の頭の中には屋敷の図面がしっかりと描かれているらしい。

私が部屋に入ったとき、その不気味な姿は部屋の中を眺め回していた。

「さあ！ 観念なさい！」

その声に驚いたように振り返り、私を見て少しだけ口を開けた黒猫。どうしたんだろう。何かに戸惑つてるんだろうか。もしかして大方私の足の速さに？ ……何でもいい。これはチャンスだ。

私は一気に黒猫との距離を詰め、素早く足を繰り出した。

ひゅつ

が、私の攻撃は体をひねつて難なくかわされてしまった。渾身の蹴りは空を虚しく切るだけ。でもめげずに大勢を立て直して攻撃を続ける。でも、身軽な黒猫には全て避けられ傷一つ付けられない。すばしつこい。そのくせ彼は逃げない。まるで楽しまれていふだ。怒りばかりが沸き起つるままに、時間が過ぎていつた。

いくら避けても彼の息は全く上がらない。私は15分近くやうさ

れてこんなに苦しいのに。

大分息が上がってきた私を見て、彼は口元だけでもわかるほどにやりと笑う。ああ、はっきりと馬鹿にされた。私が爆発した怒りにまかせて飛び出そうとした瞬間。

だんっ

勢いをつけたと思つたら信じられない高さまで飛び上がり、私の頭上を軽々飛び越えていく。

「しまつ……」

そして彼が着地した先は、ある絵画の上だった。

「これは試合じゃない……ゲームだ。それを忘れたお前の負けだ」なんとなく感じていたけれど、やつぱり黒猫は男性だつた。かなり低いアルトの声で、きつい一言をお見舞いされた。私が何も言い返せないでいるうちに、彼は絵画をどうやつたのかいつのまにか壁から外して、枠ごと持ち上げている。

私が振り返るまで10秒もなかつたはずなのに。

あまりに鮮やかな動きにやつと私が彼の方へと動き出したのは、黒猫が既に視界から消えた後だつた。

傍にあつた窓を手品の様に開けて飛び降りたのだ。本当に猫みたいな奴だと思つ。

「待ちなさい！」

慌ててその窓に駆け寄るも……既に庭には闇夜が広がるだけで、黒猫の姿はなかつた。

「くつ」

私は壁に手を打ちつけて、素直に悔しさを表現するしかできなかつた。分かつていた分、誰よりも有利だつたはずなのに、すぐそば

にいたの。」

「………… 盗られたのね」

気がつくと後ろにラルタが立っていた。全く驚いた様子もない。確かに今までの成功率100%の怪盗じや、こんな子供には捕まえられないって言う理屈は分かる。でも、でもつかつても捕まえたかった。

「ラルタ…………」「めん…………」

私がうなだれて声を絞り出すと彼女はこちらに向かって歩いてきた。私が、何らかの説教を覚悟した時、そつと肩に重みがかかった。おそるおそる田を開けてみると、ラルタが私の肩に手を置いてほほ笑んでいた。

「いいのよ。それに……あのぐらいのもの構わないわよ、ね。母様」
そうしてラルタは後ろを振り仰ぐ。あのぐらいって、あの絵画、300万はするんじや。……お金持ちは考え方まで違うんだろうか。私が呆然としていると、背後から出てきたおばさまも起こつている様子はなかつた。

「ええ、それよりリーちゃんが無事でよかつた」

「怪我はないかい？」

おじさままでいたなんて！ 本当になんで気配がなかつたんだろう。それとも私のショックが大きすぎたんだろうか。

「すみません……逃がしちやつて」

本当にどうしてこんなにいい人達なんだろう。私は申し訳なくて頭を下げられるだけ下げた。すると上の空気が若干変わつた。

「ねえ……気にしないでつて言わなかつた？」

ゆつくりと顔を上げると、またあの有無を言わせない瞳がむけられていた。

「…………ハイ」

私が不承不承に頷くと、おじさまが溜め息をついた。

「悪いがリーラよりも悪いが警察の方が無様だらつ……なんで全員

眠りこけてるんだね？」

「睡眠薬でもまいていたのかしら？」

「そのわりには私、眠くなんてならなかつたよ？」

「……」

腕を組んで考え込む私達4人。すると話声に反応したのだろうか。

「…………う…………ん」

近くでうめき声がした。見ると警官の一人が目を覚ましている。私は慌てて駆け寄つて起き上がらうとしていた彼に手を貸す。

「大丈夫ですか？ 何があつたんですか？」

彼は夢見心地な瞳をして遠くを見ていた。はつきり言えば目の焦点が合つていないので。

「見慣れない男が…………いきなり現われて……丸いものがついたものを振つたかと思つたら皆倒れて……気がついたら今…………みたいですね」

最後の方はばつが悪そつに言われた。でも私には、彼を責める気なんかこれっぽっちもない。むしろどういうことだろうと、今にも答えが浮かびそうなパズルを田の前に出されたような気がして、一生懸命頭を回転させはじめた。

「…………催眠術でしうね」

私の頭の整理がつくまえに、ラルタの落ち着いた声がした。確かに当てはまる事といえばそのぐらいだ。私も何度か街で見たことがある。掛けられた人はまるで嘘のように……手足をばたつかせて鳥のよつな動きをしたり、ものすごく熱い熱湯に平気で手を入れたり、掛けられた瞬間どんなに振り動かしても起きなかつたり……そんな不思議な技なのだ。

「はあ……」

「そういうことね……」

またしてもラルタが納得したよつな声を出す。もつづラルタばかりづるい。

「何、何がわかつたのラルタ？」

「黒猫の御告げが噂にならなかつた理由よ」

「……大方催眠で忘れさせられてたのね」

おばさまの言葉に、やつと納得がいく。普段めつたなことでは何

にも関心を示さないラルタだけれど、不思議がつてからずつと考え
ていたらしい。でも、私には、まだ分からなことがあつた。

「じゃあどうしてシャツトさんの奥さんは免れたの？ 確か不手際
とかあの少年は言つてたけど……」

「それは多分あの人……大勢のお供なしでは絶対に何処にも行か
ないからでしょう？ 寝る時すらボディガードがいるもの」

ラルタが苦々しげに吐き捨てた。好き嫌いはつきりしているラル
タらしい。

「さて、もう気は済んだだろ？ 後は私たちに任せて、二人とも寝
なさい」

おじさまが私たち一人に時計を指し示す。確かにもうすぐ12時
だつた。でも私はまだ二階にはいけない。

「あ、あの……もう黒猫来ませんよね？」

確認というよりは自分が納得するため聞いた。今日一日で破壊
された窓ガラスの修理代だけでも膨大な額だ。なのに、彼らの反応
は違つた。

「……さあどうだか

おばさまとおじさまはなぜか顔を見合わせて含み笑いをする。

「お、おじさま？ おばさま？」

思わず二人の名前を読んでみたけれど……何故か答えてくれない。

代わりにおばさまが私を見た後に夜空を見あげた。

「……今頃悔しがってるんじゃない？」

そして楽しそうにくくりと笑つたのだ。

ほんとにダイロット家の人つて本当に何考えているのか分からな

い。

* * * * *

* * * * *

そしてその彼らはティスの言つた通りに今までに黒根の根の上で歯を
噛みしめていた。

「くつそ……これまさか」

『あんちゃん』がありえないといつ歯で呟く。

「ああ……そのままかだ」

黒猫が仮面をつけたままで拳を握り締めた。

「こんな……こんな事今まで初めてだよ」

幼いティムは今にも泣きそうだ。

「なあ……お前ランダムに選んだんだろ?」

『あんちゃん』は確認するかのように黒猫を見る。

「ああ……物凄い数のギャラリーの中から」

「…………」こんなに手の込んだことしてるなんて

すると黒猫は その口元に笑みを、ただし口の端だけに浮かべ

た。

「そつちがその気なら。こつちにも考え方がある」

そして立ち上がる。その顔はやはりわからないが、ものすごく怖いオーラが溢れていてティムは思わず『あんちゃん』に近寄る。だがその『あんちゃん』もおびえてこよつてティムを抱き寄せる手に力がこもつていた。

「一体……何する気?」

恐る恐る問い合わせる。すると黒猫はこれ以上『乐しい』といつ感覚を捻じ曲げて出る声はないと忍び笑いを隠さつともせず、

「ぶつ倒れるまで…………」やつてやるのや」

とだけ言つた。その意味が分かつてティムはまた怯え、『あんちゃん』にしがみつく。

「…………鬼」

あんちやんは嘆息しながらそれだけ言つた。

「鬼はどうしただよ？」

間髪入れない黒猫の声。一人の仲裁役である『あんちやん』はこの話題から離れようと口を開いた。

「……まあそれはいいとして、例の少女はどつだつたの」すると黒猫の周りの『楽しいこと』オーラはいくらか収まった。ティムのしがみつ力が幾分か弱まる。

「……栗色の髪に緑の瞳、確かにティムの言つたとおりだつた」

「でしょでしょ」

もう怖さは感じなくなつたのか今度は瞳を輝かす少年。子供つて忙しいと思わずティムを見た『あんちやん』である。

「けど……まだ分からない。ものすくおてんぱだつたし……あいつらなんかに肩入れして」

「……そりや人は変わるよ」

『あんちやん』が言つもの、彼は口をつぐんだまま。そんな彼を見て、ティムは『あんちやん』に耳を寄せた。

「……黒猫らしくないね」

「……こうじう時は人の意外な一面が垣間見えるものだからね」

訳知り顔でそういう『あんちやん』に対して、ティムは訳が分からぬといつた顔。

「……こうじう時？」

「ティムにはまだ早いよ」

ぽんとティムの肩を叩く『あんちやん』。それで話はおしまこといつかのようだ。

「何それ？」

不服そうな声をだすティム。けれどもそれ以上何を言つても、『あんちやん』は何も答えてくれなかつた。

「…………こちわる」

彼のそう呟いた声を最後に三人は黙り込んだ。いや、ティムが話すのをやめたから静寂が訪れたのかも、しれない。

4・GAME START（後書き）

リーラの感情が言葉になつて いるところは、あえてです。
ですが、なにぶん未熟者なので、変に感じたら、感想などで教えて
いただけるとありがたいです。

5・法則がねじ曲がるとき（前書き）

お待たせしました。お気に入り登録ありがとうございます。この話、ちょっと暗い展開になるのは否めないのですが、あなたのために頑張りますっ！！

5・法則がねじ曲がるとき

「…………もうこれで3日連続、信じられない」
休み時間だつて言つのに、私はちつとも気が抜けなかつた。主語
も何もないけれど、後ろの席の今は椅子を回して正面にいるラルタ
には分かつたらしい。つていうか、分かつてもらえないと困る。
「確かにね……聞いたことないわ」

「そこよつ」

教室の後ろの席で頬杖をつきながらのんびり相槌を打つたラルタ
に向かつて、衝動を抑えきれずに私は立ち上がつた。

「一体何なのよつ毎日毎日つー!? 黒猫つてこんなに何度も同じ家
入らないんじやないの?」

私は思いつきり怒鳴つていた。完全なハつ当たりだけど、もう我
慢できない。教室にいる皆が私を見るけど、構うもんか。

つまり、おばさまの予言が見事的中したのだ。

あの次の日も、また翌日も、黒猫はティロット家にやつてきた。
来るだけならいい。あいつはジャスト9時に来るので騒ぎが終わつ
たあとでも十分眠れる。けれど、来ると言う事は何か盗んでいくと
いうこと。結果的にいくらおばさまに言われても私の罪悪感は消え
るどころか膨らむばかりだつた。

しかも同じ家に入るなんて前代未聞な話だ。相当なプレッシャー
と責任を感じて妙に頭がさえてしまつて、ベッドに入つた所で眠れ
るわけがなかつた。だから、本を読んだり考え方をするしかなくて、
ここ数日は朝日の観察が日課だ。

「私に聞かないでよ……それと、ちょっと落ち着いたら?」
でもラルタが何も知らないのは当然だから、癪癪を起した私にか

なり不機嫌だった。

「…………ごめん」

私は、ぎこちなく椅子に座った。

今、私達は、この街でも名門の学校の教室にいる。当然ある程度お金がないと入れない。私は普通の学校で良かったし、むしろ教育なんかいらないと主張した。でもラルタも彼女の両親もとんでもなく頑固で譲ってくれなくて、結局非常にありがたいことに私はラルタと同じ学校に通っている。

だから授業中には眠れない。

たとえ財産に余裕があつたって、通わせてもうう以上はしつかりと知識を吸収する。それがせめてもの恩返しだと思う。その精神は入学してから今までずっと続いている。でも、どんなに頑張つても成績は並の上でそれは申し訳ないと思つてゐる。ラルタなんか一週間で起きてる時間が少ないので常に主席だし。でも、きっと世の中つてそういうもんなんだともう割り切つてゐる。

「…………きっとまた今日も来るよね」

「多分」

「…………なにか私、怒らせるような事、した?」

疑問形でもラルタに聞いたわけではなく、記憶を探るように天井に目を上げ、頬杖をついて考え込む。でも、そもそも黒猫とあれ以上に接点がない。

「気のことないでしょ? 所詮悪党なんだから」

「…………そりやそうだけど…………あふ」

知らない内にあぐびが出ていた。慌てて手で口元を押さえる。けれど今はただでさえ昼ご飯を食べてもいい時間で、実際食べた。だから眠くなるなというほうが無理だと思う。ただしあくまでも私以

外の人はね。

「……慢じやないけれど、私があぐびを朝以外、しかも学校でするなんて、それこそ明日は雷か台風かといつほど珍しいことだと、自負している。」

「……眠いの？」

「だからラルタも目を見開く。私は正直うんと頷いて突っ伏したかつた。……出来るなり。」

「なつ馬鹿言わないでよー！」

「実際の私は自分の頬をつねりながら大声で怒る。そんな彼女にラルタは黒い瞳をまっすぐに向けた。」

「……アンタ……ちゃんと寝てるの？」

「も、勿論……」

「そう言つてるのに、ラルタは私の言い方で全部分かってしまうらしい。だつてあの瞳は無理。嘘なんか付けない。絶対……それ分かつてラルタはやつてるんだ。」

心底呆れたと言いたげな溜め息の後で、彼女はまた私を見据えた。

「今日はもういいから休んでなさい」

「なつ駄目だつて！ そもそも私の責任なんだから」

「私は体の前の空氣を切り裂く勢いで手を振った。ラルタはその強固な意志に机に手をついて、また私の瞳を覗き込む。」

「同じ目だけれど、責められてるんじゃないと分かる、少しだけ優しさを含んだものだつた。」

「……心配してるのよ？」

「でも、ラルタの珍しく素直な言葉にも、私は意志を曲げられなかつた。ゆつくりと首を振る。」

「分かつてるけど……やつぱり寝るなんて出来ない」

「……そう」

諦めたように私から田を離すラルタ。「ええ、いいですとも、たとえ折れたと言われようと、粘り勝ちと言われようど。」

「ありがと！」

私はラルタの手を握つて弾んだ声でお礼を言つた。

「でも今日が終わつたらちゃんと寝るのよ？」

彼女は最後に釘をさすのを忘れなかつた。

「……はい」

ただ、そんな言葉がなかつたとしても本当に今日が終われば私は寝ちゃうと思う。それこそ…………その場にばたんと倒れる勢いで。もう正直、限界……。

だから今日は何が何でも決着付けるわよつ黒猫……！

バリイイイン

ジャスト9時。『』丁寧に毎田毎田違う窓ガラスを割つて黒猫は侵入してくる。言い換えるならば…………それがゲームスタートの合図だ。あいつがそう言つたから、私もそう考へることにした。不謹慎だから心の中だけで。

「来た！」

私は食堂の椅子から立ち上がり、音がした方へ駆けていく。ラルタは既に毎間はあんなことを言いながらも、やつぱり傍観者に徹していた。もう、そのことについては諦めている。

警察は3日目の時点で呼んでいなかつた。催眠の前にはひとたまりもないから呼ぶだけ無駄だとおじさまが判断したから。でも、どうして自分たちには術を掛けないのかそれは考えても全然分からなかつた。掛ければ楽になるのではないなどと、敵のくせにふと思つたりもした。

「毎日毎日よく来るわね！」

私は黒猫を睨み付けながら、精一杯の罵声を浴びせた。ここはいつもの大広間とは違う何もない部屋だつた。黒猫をいつもと違う場所に追いつめることに見事成功したのである。ここは狭くて、人が10人入れば一杯になつてしまつような部屋。物置だ。

「ならいい加減本物渡せ！」

いつものように低いが、かなり怒つた、落ち着きのない声の黒猫。でも私は戸惑うしかなかつた。彼の台詞の意味が分からなくて。

「は？」

思わず間抜けな声を出してしまつていた。

「とぼけるな。この家から盗んだものは全てよく出来たレプリカだ。

「は、はああ！？」

呆れると同時にようやく分かつた。そりやあ毎晩来るわけだ。プライドずたずただしね。そう納得した途端、ふつと意識が翳つたような気がした。手の甲をつねつてみたけれど、寝不足で走つたせいか頭はがんがんするし、体もうまく動かない。

「なんでもいい、本物を寄こせ。そうしたら、お前の前から消えてやる」

黒猫の声が、低すぎて、なんというか……とっても、気持ちいい。低い楽器を聞いているように、独特の眠気が襲う。普通なら怒気交じりの声なんかでこんなふうにはならないと、思うんだけど。や

つぱり3日半の徹夜は、ちょっと、堪えてる、みたいで。

「だつたら……見つけてみれば？」

急激に、重たくなる瞼。威儀を保たなくちゃ。そう思つて、自分の腕を強くつねる。でも、それでも、どうしようもなく眠……い。

「…………おい？」

「あんたがいう本物が……ビリにあるかなんて……私は……しらな

…………」

言ふ終わる前にリーラの体は前のめりに傾いていた。

「おいっ！？」

その彼女の変化に瞬時に反応した黒猫が、慌てて近寄りその体を支える。

「…………」

その時既にリーラの意識はなく、規則正しい寝息が聞こえてくる。急激に重たくなる体。

「まさか…………馬鹿かお前は！」

怒鳴つたものの、すぐに呼吸を取り戻し、黒猫は彼女を抱き上げ、部屋にあつた窓から音もなく外に出た。

「…………ん」

目を開けたら毛布が見えた。そして体全体に柔らかい感触がある。どうやらベッドの上にいるみたいだ。でも、部屋に明かりはついていないくて、月明かりだけが窓から差し込んでいる。それがなんだか部屋全体に不思議な空気を漂わせていた。私はベッドからぼんやりと窓に映る三日月を見ていた。普段はあまりそういうことはしない

しばらくそのまましていたけれど、なんだか違和感を覚えて、ゆっくりと起き上がった。その時に寝る時いつも掛けるのとは別な毛布が掛けられていることに気が付いたものの、まだ意識ははっきりしないのでそれがどうしたことだか分からない。

ただ、いくら暗くても、ここが自分の部屋だとこいつとは分かった。

でも、どうしてここにいるのか思って出せない。よく見たらまだ制服姿だし……。

そんなことをぼんやりと考えながら首を回した私は……そのままの体勢で動けなくなつた。

私の目線の先には、ここにいるはずのない人物がいた。しかも椅子に座つてこちらをじっと見つめている。鈍く銀色に光る仮面。

「くつ黒猫なんでこなんど」、「会話の途中で寝るよつな奴に言われたくない」

やつと体の感覚が戻つてきて口が動くようになつて、何とか搾り出した声なのに、ものすごく失礼な言葉で遮られた。怖さも忘れて腹が立つ。けれどその言葉で自分の今をはっきりと思い出した。そして同時に、確かに目の前でそんなことをされたら困惑など思つている自分もいた。

でもかといってじつはまた黒猫がここにいるのかわからない。でも、この状況からして、会話の途中で寝てしまつた自分を「丁寧にもこの部屋に運んでくれたのは黒猫らしい…………なんか、おかしい気がする。でも、一応感謝はするべきなんだろうか。

「…………」

「いろんなことを考えて黙ってしまった私を見かねたのか、黒猫は椅子から立ち上がった。その様を見ながらふと思つ。どうして私の目が覚めるまでこの男はここにいたのだろう。しかも、捕まるのを覚悟で。いや、たとえ何があつたって、彼は捕まらない自信があるから、ここにいるんだろうけど。

「……だめだ。考えがまとまらない。それ以前にわからないことが多すぎで。

「お前、まさか寝てなかつたのか?」

聞いてきた彼の声は呆れた響きを含んでいた。

私はその途端、本当に何の前触れもなく、ぼやけた意識がはつきりして、体が怒りだけに支配されるのを感じた。けれどそれでも怒鳴るほど元気はなかつた。まだ体がぐりぐりするのだ。

「……寝れないに決まつてゐるでしょ。あんたが私のせいに来て、盗られるつて分かつてゐるのに……ぐりぐり寝れるほど……鈍感じやないんだから……」

せめて『馬鹿じやないの?』という皮肉を込めて目一杯意地悪な口調で言つてやつた。少しだけ気分が晴れた。

「…………悪かった」

「え……?」

彼は信じられないことに素直に謝つて……いつちに向かつて歩いてきた。私はその行動に驚くのも忘れて……呆れた。同時にまた冷静になつて考える。まさか彼は、それを言つためだけに私の目が覚めるのを待つていたのだろうか?

けれど黒猫はどうしたことか立ち止まるかと思つたのに、私との距離が1mになつても止まる気配がない。

「…………」

私はその様を何故か遠くからの画像で見ていく自分に戸惑いながらも、またしても思考が別のものに塗りつぶされていくのを感じていた。今度のは…………恐怖だ。それもある子供に抱いたのと同じ、でも比べ物にならないくらいの強いもの。だつて、相手は男性、しかも正体不明でここは寝室だ。何されるか分かつもんじやない。や、やばい。

「ちょ、それ以上、こっちに来ないで！！」

思わず足をベッドに投げ出したまま体をひねり、必死で両手を前に出して止めた。その命令に、素直に彼は立ち止まる。

「…………俺が怖いのか？」

小さな声で問いかけられた。「、こいつは鏡というものを見たことがないのだろうか…………？」

「こいつ怖いに決まってるでしそう！ 特にその仮面！ それ以上近付かないで！…………はあ…………はあ」

とにかくもう見たくなくて、田をつづつて怒鳴った。すでに呼吸も荒くなっている。

対立するならまだしも、今は完全に無防備だ。しかもこの月明かりに浮かび上がる、黒い影。笑われたつていい。人間怖いものははつきりした理由なんてなくたつて怖い。もう今襲われるなんてさすがに思つてなかつた。それでも体はさつきよりも震えている。

「…………」

すると黒猫は、微かに顔を伏せてその仮面に手を掛けたかと思うと……外した。私が息を呑む間に、彼はそれを床に投げる。絨毯だつたから、音なんてしなかつたけれど、私の中には雷が落ちたような衝撃音が鳴っていた。

「なつ……ま……」

だつて、あの、間違いでなければ、仮面つて言つのは、正体を隠すもので、なくなつたら困るんじや……特にあなたは犯罪者、でしょう?

「……これでも……まだ怖いかよ……」

そしてゆつくりと上げた、暗いながらも月明かりの射しこむ部屋に浮かび上がつた彼の顔に、私は知らず釘づけになつていた。

6・何もかも飛び越えて

「…………赤い…………瞳…………」

私は見たまま口を動かしていた。

彼の目は見たこともない……血のよくな赤い色をしていたのだ。てつたり黒髪だから瞳も黒かと思っていた。いや、金だろうと、青だろうと縁だろうと、こんなに驚かなかつたと思う。赤い目なんて、今まで見たことない。

さらに私の予想は裏切られ続ける。もつと大人かと思っていたのにその目を見ていると、どうも私と同じ位の歳のようだ。人間の顔つて、顎のラインで決まるみたいだけど、顔全体のバランスを見ないと分からぬこともある。しかもその顔は美青年と言つても差し支えないくらい整つている。ただし今は無表情で、といつよりもなんだか怒つているようだ。理由は分からない、けれど。

「どうなんだよ？」

なおも、不機嫌な更に低い声で聞いてくる黒猫。でもその怖さはどうしたことか半減していた。あの仮面がないせいかもしれない。だつてその瞳は、まるでルビーのようだ

「綺麗…………」

私は、思わずそう呟いていた。けれど、その声が自分の耳に入ってきたとき、何を言つているのか分かつて慌てて口を押さえる。

けれど、そんな私の行動も虚しく、その言葉はしつかりと黒猫にも聞こえたようだ。目を見開き、そして何故かますます距離を縮めてきたのだから。

何がどうなったのか分からぬ。はつきり分かるのは私はまた黒猫の機嫌を損ねたらしくてことだ。さつきより歩くリズムが速いし、その顔は完全に怒っているみたいに見える。ベッドの隅ぎりぎりまで来る瞬間に僅かに口が動いていた。けれど……小さすぎて聞き取れなかつた。

「…………」

立ち止まつた後は何も起こらない。思わず見上げると次の瞬間……肩に温かい感覚があつた。

体の前から手を、それも両腕を回されて、それは私の背中に向かつて前に垂れ下がつていた。その手は、そつと背中で組まれている。でも拘束されているとは思えない。

逃げようと思えば出来た、それに信じられないくらい優しい手だつたから。それでも恐怖というものは感じるもので、心臓が苦しい。

「ちょっとなにする」

突然の事に体は固まりながらも声を上げると、彼の顔は予想外に近いところにあつた。

「俺を、怖がるな」

上から低い声が降つてきた。命令口調だが、その声はさつきとは違つて穏やかだ。でもこの状況はわけが分からぬ上に、怖がるなつて言われてもそれは無理がある。無意識に体が震えだした。

「何…………言つて「怖がるなよ。何もしない」

私の声を遮つて囁くようにそう言つたかと思うと同時に、組んだ手を外して私の腕、それも彼からは遠い方の腕を後ろに引っ張つたので、私は無理矢理彼に背を向ける状態にされた。そのまま強引に体を倒されて、倒れきる前に今度は後ろから抱きしめられる。

「やつ、やめつ…………いや…………」

なにもしないつてしてるじゃなー！

何より彼には得体の知れない怖さがある。その彼に訳も分からずこんなことされて……平常心が保てる訳もない。

「ちよ…………はな…………やあつ」

声は出しているのだが、とても小さくて、何より体は恐怖から動かなくて、まるで人形のようのような私はこの男になすがままにされている。せめてもの抵抗にと力の入らない手で、お腹辺りにある黒猫の手を引っ張つてみるけれど……逃れられない。

本当にこの状況は、怖い。

心臓の鼓動はもう痛いくらいで、呼吸も既に犬の様に口からしかできず、本当に息をするのが苦しい。

「頼むから少し落ち着いてくれ」

少し辛そうな声。でもそれ以上に呼吸が限界だ。

「…………な…………に…………い…………て…………」

言葉はもう、かなり途切れ途切れにしか出でこない。 どんなに言われても今は無理だ。何でこんなことをされるのか分からず、荒い呼吸のまま気がついたら黒猫の方を振り返っていた。

額がくつつきそうなほど近くであの赤い瞳が揺れていた。

それはとても優しい光を放つていて……一瞬その様に見とれてしまう。怖いものは理屈なしに怖いのと同じで、綺麗なものは、どんな状況でも、綺麗だから。

呼吸も少し楽になり、わずかだが神経も正常に動き始めたようだ。けれどそんな自分に嫌気がさして慌てて微かに動くようになつた体で抵抗しながら、また口を開く。

「これで……落ち着いてなんて……」され「リーラ」
いきなり低い声で名前を呼ばれて戸惑つて、気がついたら隣の
じが出来なくなっていた。そして目の前は真っ暗。

わたしなにされてる？

「…………」

「リーラ」

やつと開放されて……発せられた低い声に黒猫を見上げる。

「…………」

感じていたのは怒りでも憧れが碎けた絶望でもなかつた。自分で
も信じられないことに……今感じていたのは彼の望んだとおりの安
心感と、同時にやつてきた急激な眠気。

きつとこの低い声のせい……。もう……怒る気にも
なれ……な……い。

「…………」

「「めん…………」

黒猫は自分の腕の中で眠つてしまつたリーラをベッドにそつと寝
かせて……開け放した窓から闇夜に消えていった。

一方「ひはとある公園。時刻は既に夜の2時にならぬとしていた
「…………黒猫帰つてこないね」
空よりも少ししじだけ低いところを見ながら、そつといたのは小さい

ティムだ。でも、この時間にこんな子供が起きているなんて絶対におかしい話で、案の定彼はゆっくり瞼をこすっていた。その目はうつろで今にでも夢の世界に旅立ちそうである。それでも待っているのは未だ帰つてこない黒猫だった。

「ああ……なんかあつたのかもしれない」

『あんちゃん』も心配を足して同意する。

「…………あの子と？」

どう考へても一桁の歳に見えるこの少年がこの時間に発するはない冷静な声で、聞いた。けれど結局そんなティムの努力むなし、それはまた『あんちゃん』に溜め息をつかせる結果になるだけだった。

「ティム…………」これ以上余計な詮索は無用だ」

「…………はあい」

するとその時、一人しかいない公園に突然現われたのは黒い影。黒い髪に赤い瞳……黒猫だった。

「お帰り黒猫！ あれつ仮面は？」

割りとしつかりした足取りで、沢山の質問を浴びせかけながらティムが黒猫の方へと急ぐ。けれどそれを軽く手で制して、

「少し……一人にしてくれ。それと、お前はもう寝ろ」とだけ呟き、そのまま水のみ場のほうへ歩いていった。

「…………」

その彼の尋常でない様子に驚いたのか、ティムを公園のベンチに寝かせてから、『あんちゃん』は黒猫の元に向かった。

一人石で出来た椅子の上で、ぼんやりとしている黒猫。その横の程よく距離のある同じような椅子に腰掛けて、十分時間をとつてから『あんちゃん』は口を開いた。

「…………俺にも話す氣になれない？ ひょっと遅すぎたんじゃないの？」

誰もいないから静か過ぎる公園の空氣は、彼の言葉が発せられてから余韻が消えるまで、時間が止まつたような錯覚に陥らせる。

「…………拒絶された」

痛切な黒猫の声。その意味を分かるのは…………たぶん隣にいる男とティムだけだ。

「…………ふーん…………期待してないんじゃなかつたの？」

少しだけからかい口調になるのは…………励ますためか。

「…………ああ」

「だつたらなんでそんなに落ち込んでるのか？」

「…………なんでだろうな」

黒猫は微かに笑つた。少年のそんな様子に胸が締め付けられるのはこの時じやなかつたらきっと見ていた全員だつたはずだ。

「それで…………？」

勿論『あんちゃん』もその一人で、慎重に言葉を選んで聞く。そしてそれは、紛れもなくリーラのことだ。

黒猫は膝の上で手を組んだ。

「…………間違いない」

「…………理由は…………？」

「…………この目見ても…………驚かなかつた。言つた事も同じだつた」

それが横にいた『あんちゃん』の目を見開かせるだけのものであるのは確かであるようだ。

「…………そりや間違いないね」

やがて彼はぽつんとそれだけ言つた。すると黒猫は立ち上がる。それを追つよつて『あんちゃん』も立ち上がつた。

「…………でも…………俺を全身全靈で拒絶した。」

空を見上げて咳いた黒猫。その赤い瞳はとても寂しそうで彼もこ

んな顔をするのかと彼を知るものならきっと誰もが思つだらけ。

冷静沈着、神出鬼没。その姿は不幸の証

その黒猫が、実は仮面の下にこんな表情を持つていいなんて。と

「…………お前のことだから説明も何にもしないで、一歩間違えば犯罪のようなことしたんじゃない？」

彼のその顔の意味も、どれほどの辛さかも分かつていて、けれど声を掛けずにはいられない。それもまたしても、あえてからかい口調。

『彼の口からからかい口調が出る=誰かを励ます』という公式が既に出来つつある。

「…………」

案の定黒猫は先程の自分の行動を思い出したのか、黙り込む。確かにあれは一步間違えば である。

「もう……不器用とこつかなんと言つか……じれつたいよ見てる方は」

わざとらしく溜め息までつく『あんちゃん』。じれつたいというのではなく、するどついに我慢できなくなつたのか、黒猫は『あんちゃん』に視線を投げた。

「つるさいーー

その瞳は、興奮していて、赤いから本当に燃えているようだった。火花もはぜていたかもしぬ。

「はいはい……ただ、伝えないと……気付かれないよ。一応言われたとおりにあの家族には、いやあの子にはなんにもしてないけどれ……」

ディロジット家の推理通り、『あんちゃん』は術師だつたようだ。

そして、ここに密かにリーラの疑問も解決される。

「悪いな…………」

瞳の炎を押さえ込んで黒猫が無理な笑みを浮かべる。

「どう致しまして」

『あんちやん』の声が明るく鳴る。これまでの会話からしてどうも彼は黒猫と親友の位置にいるらしい。一方的でもなく、かといって距離を置くでもなく……。

「俺と関わったらくなことにならないうて分かつてゐるに……田の前のあいつ見てたら……拒絶に耐えられなくて……気付いたら……」

「……」

咳くよりに囁くよりに叫びかせる黒猫。

「…………俺はこいつと思ひたどな。そりこいつ素直さ。そのせいにで確信持てたんでしょ？ それに俺は今不幸だとは思わないし」

「…………」

「いい加減赦してあげたら？ 自分を」

少し呆れを込める。それはおそらく何度も何度も彼が黒猫に行つてきたことなのだろう。彼にとつては黒猫が自分を許さないのは百も承知であり、でもあえて言つのだ。言わざにはいられないのだ。

彼に苦しんで欲しくないと望むからこそ。

「…………赦されていいはず、ない」

けれど黒猫は低い声でそう咳くだけだつた。今日もまた、彼の罪悪感を意識させるだけで終わってしまったようだ。

「ほんと…………優しいんだから」

そう言つてかない『あんちやん』は、ふと息を吐くと立ち上がる。

「誰が？」

聞いて来る黒猫。絶対に答えはわかっている。『あんちやん』

と田が言っていた。

「さあね」

そう言い残して『あんちやん』は黒猫の傍を離れていく。振りかえることはない。

「…………」

残された黒猫はまた空を眺め始める。

その赤が見ているのは、一体何なのだ？

（できれば今回は、あとがきをお読みください。）

6・何もかも飛び越えて（後書き）

赤い瞳というのは、実際にあります。しかし、遺伝子上の病気であります。

ただ、小説の場合は、特別な感じを出したい時によく使われます。ですから勿論この話でも差別するつもりはありません。ただし、赤と言つ色の特性上、黒猫は苦しんでもいます。気分を害されない様にあらかじめ申し上げておきますが、この話は実は、設定をとある漫画に似せて作ったもので、クオーター的に一次創作なんです。赤いと言つのもそこから来ています。転載するにあたつて、他の色も考えましたが、紫や灰色では、これから黒猫がやつしていくことに、どうしても納得がいきませんので赤い今までやりたいと思います。もしも、苦情などありましたら、紫に変えます。ご理解ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5694y/>

True Night

2011年11月24日19時52分発行